

# 京都部落問題 研究資料センター通信

第34号

発行日 2014年1月25日 (年4回発行)

編集・発行 京都部落問題研究資料センター

## 報告一〇一三年度部落史連続講座 II

当資料センター主催の「二〇一三年度部落史講座II」を京都府部落解放センターで、一月二二日、二九日、一月三十一日の三回にわたり開催しました。

各回の講演要旨は次の通りです。尚、詳しくは三月末に発行予定の講演録をご参照ください。

### 第1回 留岡幸助と部落改善論

講師 関口寛さん  
(四国大学准教授)

留岡幸助は二〇世紀初頭、欧米の犯罪学などの科学的研究を摂取しながら監獄改良や少年感化事業など多岐の社会改良事業をてがけた人物である。部落改善事業が政府によって開始されると、その事業を理論的に指導・牽引する役割も果たす。

留岡の部落改善政策の論理には次のような特徴がある。

一つは当時の西洋科学に影響をうけたもので、部落民は悪い環境による負荷をうけて「変質」した性質を持たされているとする「人種」主義的な捉え方で、その「人種改良」を目指すとした。また他方では、キリスト教的ヒューマニ

ズムに根差し、同じ立場の人間としてその人格を認めることの重要性を説いた。留岡は、これらは矛盾するものではなく、社会・国家の秩序を守るために人道主義を唱え、反社会的な性質を改良しなければならぬとした。こういった考え方は、賀川豊彦などにも見ることができ、部落改善の論理は後の水平運動にも引き継がれている。

現在、留岡については、その業績の肯定的評価がある一方、差別的な眼差しへの厳しい批判がある。これらの多様な側面を統一的に捉える視点の必要性を語られた。

### 第2回 高田保馬の 身分・階級・民族論

講師 田中 和男さん  
(龍谷大学非常勤講師)

高田保馬は戦前・戦時期に、日本の社会学・経済学の成立に大きな役割を果たした一人である。これまでその先駆的な役割や理論紹介がなされているが、部落問題に関する発言についてはほとんど知られていない。

高田は一九二六年から三三年にかけて兵庫県清和会、岡山県協和

会、中央融和事業協会などの融和団体で講演を行い、部落問題について、血の問題ではなく社会的、歴史的につくられたものである、解決には国家や地方公共団体の働きかけが重要であると話している。高田がなぜ部落問題について論じたのか、その理由の一つは、京都大学で米田庄太郎の弟子として社会学を学んだことがあげられる。米田は奈良の被差別部落に生まれ、そのことで教授になる時に妨害があったといわれている社会学者である。

また、それ以前からも社会問題について関心を持っていたことは第五高等学校時代の学内紛争などへの関わりから見る事ができる。その後、高田の関心は階級論から民族論に変わり「転向」と言われるのだが、その根底にはそれまでの差別に対する考え方がつながっているのではないかと指摘された。

### 第3回 漆葉見龍と京都市社会行政をめぐる人々

講師 杉本 弘幸さん  
(京都工芸繊維大学・佛教大学非常勤講師)

漆葉見龍は戦前の京都市社会行政の実質的な設計者である。これまで朝田善之助との関係や市役所

内左翼グループ事件について『京都の部落史』などで取り上げられているが、本人が書いたものは残っていない。彼の功績は社会行政職員としての組織者としての側面が強く、この報告では、彼と彼が組織した社会行政をめぐる人々が行った戦前の都市社会調査を取り上げて、その特徴を検討したいとされた。

京都市の社会行政は一九一八年の救済係（後の社会課）の設立から始まり、被差別部落、西陣など貧困者の多い地区に託児所などの社会事業施設が設置されている。本格的な調査は一九二〇年から始まり六年間に六八もの様々な調査が行われるが、その後、調査を精選して、社会福祉事業を行うための政策形成に特化した調査になっていく。

漆葉は一九三〇年に社会課職員になり調査をリードしていった。少ない人員・予算で在日朝鮮人・西陣・被差別部落の調査を多く行い、新聞などを使って結果を広く市民に知らせて社会事業の必要性を訴えていった。また、人員の不足は、職員の長時間労働と社会科学を身に付けた大卒の失業者たちの臨時雇用で補っていた。京都市の社会福祉行政機構はこのようにして専門化していったと説明された。

## 本の紹介

### 太田心海著

## 『自叙で綴る梅原眞隆の生涯』

神戸修

（浄土真宗本願寺派僧侶・大阪芸術大学短期大学部講師）

戦前、戦中、戦後に教団の要職にあって活動し、後に参議院議員、富山大学学長を歴任しつつ、一方で多くの著作を残した著名な教学者として、梅原眞隆は、評価は様々ではあるが、所謂「大物」という冠にふさわしい人物である。

個人的には、私（神戸）にとつて、梅原眞隆は、まず「戦時教学」の重要な担い手として現れ、次には戦時下での国家権力と教団の優秀なネゴシエーターとして現れ、さらには現在の同和教育振興会創立に尽力した戦後の西本願寺教団における部落解放運動の牽引役として、また「野々村直太郎事件」に関わって龍谷大学教授を辞任した反骨の学者として現れるという、まさに、私にとつては、謎の人物であり、大きな壁であった。

しかしこの人物を理解することは、西本願寺教団の所謂融和運動の動向と評価、さらには「戦時教

学」の形成過程などの諸問題を解く一つのカギであると考えられる。

その梅原眞隆に関して、客観的な評価や歴史的な役割の記述というよりも、彼の生涯において起こった様々な出来事において、彼がどう悩み、苦しみ、そして立ち上がったか、という、梅原眞隆の「人間的あまりに人間的」な内面のドラマを、彼自身の言葉を紹介しながら、自ら彼自身に語らせる、ということによって、彼と、彼の生きた時代と、教団の姿を、生き生きと浮かびあがらせたのが本書である。また、本願寺教団の現代史における、いくつかの重大事件に関して、その当事者としての証言という意味も併せ持っている。

まず本書の目次を紹介する。

- 一、生い立ち
- 二、東京遊学
- 三、仏教大学へ

- 四、結婚と家族愛
- 五、『親鸞聖人研究』と梅原教学の原点

- 六、恵信尼文書の出現と親鸞研究の進展

- 七、梅原眞隆の人間愛

- 八、梅原眞隆と歎異鈔

- 九、旅の人 聖跡巡礼と海外視察

- 十、師友と共に

- 十一、野々村教授『浄土教批判』事件

- 十二、龍谷大学を去る

- 十三、眞真学苑の開設

- 十四、眞真学苑の充実と展開

- 十五、戦時体制と眞俗二諦

- 十六、恩愛たちがたし 愛妹・愛児との死別

- 十七、戦禍の中で

- 十八、戦後の復興をめざして

- 十九、参議院議員として

- 二十、妻たみの往生

- 二十一、研究成果の刊行

- 二十二、富山大学学長として

- 二十三、眞真学苑こそ生命線

- 二十四、梅原眞隆の最期

となっている。

歴史的、社会的に興味深いのはやはり「野々村教授事件」と「戦時体制と眞俗二諦」であるが、そ

ういった、社会的歴史的出来事に対する、梅原の内的な葛藤や決断の様子、彼の人生そのものの瞬間として、生き生きと描かれている。

「生き生きとした再現」というのは大袈裟ではない。読者は、多くの場面で、梅原眞隆の内面の住人になる。実際自身も、思わず目頭が熱くなった場面もあった。特に、二人の子を亡くした次の文は絶唱である。

相次いで先立てる長女と末子、二人の遺骨を擁して、心しずかに経を誦する。しみじみとお念仏申しながら、正月もすぎて行く。

二人の遺影に対すれば、右左から懐かしく父を呼ぶものごとくである。すべての思いは涙に濡れる。逝ける子はいつも心の中に生きている。かれを思いこれと思う。結局、悔いが残るだけである。すまないと詫びるだけである。

あらゆる力をつくしても、屹度なおしてやる。これは父の誓いであった。ああ、長女のときにも誓いは空しくなった。それでも末の子のときは、

今度こそ空しくならないようにと新しく誓った。

けれども、ああ、人間には遂に誓いは許されていないのであった。この平凡なことわりは、久しい以前から理解していたのだが、いま、はつきりと体得される。誓いは空しくなった。力は遂に足りなかった。まことに情けないことである。

若うして死ぬと予期した私は定命の五十をすぎるまで生きのびた。何だか、夭逝した子どもが、私に代わってくれたような気持もある。

一日一日は余分の生存である。この余分の生存は報謝のためにささげて行きたい。せめては懺悔のために償うて行きたい。

逝ける子どもを思うとき、心境はおのずから浄められる。お浄土への道も髣髴としてあらわれる。

月日がたつにつれて心淋しくなる。この心淋しさがそのまま懐かしきでもある。この懐かしい「寂」をいだいて私はこの世を終るであろう。（『隆夫抄』昭和十七年九月

二十五日）。

ところで、梅原眞隆に関しては、その戦争協力の問題が、おそらく大きな関心と呼ぶであろうが、この点について、筆者の紹介する梅原眞隆の文は興味深い。

仏教は迷を転じて悟を開くことを本質としております。

これによって、人生執着に対する否定を契機として、聖なる法界に直参せしめんとするに至り、「国」を棄て「家」を捨てて涅槃に到達せんとすることになりました。けれども、ひとたび聖なる法界に参徹するや、すなわち「国」と「家」とを通して、これを具現せんとする肯定に転ずるのであります。日本仏教の特徴は正しくこの肯定の具現を企てたところにあります。

「国」を護る正法として仏教を開顕されたのは聖徳太子であり、「家」を活かす生命として念仏を開顕されたのは親鸞聖人であります。そして「国」と「家」こそ実人生の基本的機構であります。ここに日本仏教の現実的發揮が認め

められるのでありまして、「日域大乘相應地」という感歎はかかる意味において注意すべきであります。

親鸞聖人が「出家」の宗教を転じて「在家」の宗教となされたことは、万人の認めるところであるから、敢えて絮説しない。今は聖人のうえに開顕せられた鎮護国家についていささか鑽仰することいたします。（『顕真』臨時増刊、通算第四十号、昭和十三年一月一日）。

この中、特に「家」という言葉は、梅原眞隆にとって、思いの深いものであったろうことが、本書によって知られる。ここに、「現実を教学用語で説明する際の「器用さ」という、戦時教学を担った教学者に共通の特質の例として、親鸞の在家主義と日本の家意識の疑似止揚、を見ることも可能であろうし、あるいは天皇制国家のイデオロギーたる「家族国家論」の根深さを指摘することも可能であろう。

しかし梅原眞隆にとって「家」とは、家族全員が和気あいあいとして、幸福な人生を全うする場所

ではなかった。彼にとって「家」とは、なによりも自分よりも先に、病気であるいは戦死という形で、亡くなつていった子供達のことであつたらう。そして同じく先だつた弟や妹のこと、そして両親や祖母のことであつたらう。梅原眞隆は生涯に、祖母、両親、弟、妹、三人の息子と一人娘を亡くしている。その悲しみ故に、梅原の「家」に対する思いは倍加され、実際に彼の「家」を通し伝えられているお念仏の教えは、梅原にとって、それだけにかけがえのないものになる。

そして、「国」は、その「家」の延長であり、教団の戦争協力はその「家」を守る為に止むを得ざる選択として、彼には理解せざるを得なつていくのである。この間の状況の推移が、この著作によって、鮮やかに描き出されている。子を亡くす悲しみを、「一日は余分の生存」と彼に言わしめた悲しみを、私もまた知つていゝつもりである。「親を亡くした時、ひとは過去を失う。配偶者を亡くした時、人は現在を失う。子を亡くした時、人は未来を失う」という言葉がある。私が、この時代、もし彼の立場だつたらどうなつていただろうか、と思う。そう思わせる力を、本書は持っている。そして、この著書によって、また鮮やかに描かれていることは、梅原眞隆の「誠実さ」である。全生涯を通して、さまざまな状況にあつた彼はまさに「誠実に」状況に関わつていった。この著書はまさにそのことを我々に教えてくれる。

たしかに、この誠実さは、その誠実さの故に、さまざまな状況に対するさまざまな対応を生み出した。しかし、その「さまざまな対応」は、「教団を護持する」という不動の一点から生み出されたことは重要である。いや、逆に、その一点が、不動の原則として梅原眞隆の中で確信されていたが故に、かえつて彼の対応の臨機応変さが確保されたのである。それはあたかも、変化に富んだ強風の中で、凧糸を持つ人間の不動さが、逆に凧の変化に富んだ動きを生み出すようなものであつた。彼の「誠実さ」とは、状況への対応の誠実さと対応における原理貫徹の誠実さという、二重の誠実さによって成り立つていた。そのことを本書は鮮やかに描き出しているのである。ここで、梅原眞隆の行動の特徴について明らかにするために、本書のテーマとは若干ずれるが、戦時下の昭和十年に惹起した「聖典削除問題」である。これは昭和十年四月五日、西本願寺教団が、宗祖親鸞の著作である『教行信証』『高僧和讃』など表現が「国体観念に抵触する」として、著書中の「勅命」を「教命」と拝読せよ、とか、あるいは「国王不礼」という言葉は拝読しないこと、といった通達を出した事件である(拙著『十五年戦争下の西本願寺教団の思想と行動』同和教育振興会参照)。「勅命」は無論天皇の「勅命」と同表現になるし「国王不礼」といった表現は、天皇への不服従を表現するものだからである。

この通達に対して、当時の著名な学者のひとりであつた利井興隆は「曲学阿世とはこのこと」と批判し、同じく著名な布教使である雑賀貞浄は「この問題は要するに、天皇様につくか、阿弥陀様につくかの問題である」として徹底的に批判した。これに対して、「時代状況に鑑み国家の命令であれば随うべし」という立場をとつたのが梅原であつた(もちろん梅原だけではない)。戦時下において、国家と教団の緊張関係における宗教家の態度決定に関わつて、「原理に対する忠誠」と「組織に対する忠誠」との違いが鮮明になつた典型的な事件であつた。

但し、こう書くと、「原理への忠誠」が正義で「組織への忠誠」が悪という、単純な善悪判断を下してしまいがちだが、事はそう単純ではない。「原理への忠誠」に裏付けられた「聖典削除」反対運動は、結果的には教団の戦争協力を防ぐことはできなかったし、そもそも「原理への忠誠」という立場は文字通り「原理」自体が大切なのであつて、原理を蔑ろにする教団の戦争への加担やその加担によって塗炭の苦しみを与えられることになる、アジア・太平洋地域の侵略戦争の被害者への視点は持ち合わせてはいなかつた。親鸞の「教え」を護ることも、親鸞の「教団」を護ることも、どちらも戦争協力を防げなかつたという、重い課題はこれからも、現代の宗教者が担うべき大きな課題である。

いづれにしても、このような状況においても、梅原は、彼自身の決断によって、教団護持という目的に向かつて誠実に対応していつ

たのである。そして本書においていたるところに見出されるのが、この梅原の「誠実さ」である。

しかし、この「誠実さ」に問題はないのか。特に、戦時下における西本願寺教団の戦争協力において、梅原眞隆は、教団のトップとして大きな役割を果たしている。かつて、本山の押し付け人事に抗議の意を表して、宗門立の龍谷大学教授の職を辞したほどの人物が、今度は、教団護持の先頭に立ったという事実を如何に理解すればよいのか。この問題に関しては、本書からは明確な答えを得ることはできない。「自身をして語らしめる」という本書の方法論からしては当然のことではある。

しかし、本書は示唆を与えてくれている。それは、梅原眞隆のなかで、教団を護持することと、親鸞の教えを伝えることとが、あまりにも無媒介に統一されていることである。彼の、教団に対する態度は、この無媒介性に依拠していることを、本書から感じるのである。

そして、もう一点は、仮に多少の批判すべき点や問題があったとしても、一旦その組織の重要な位置についたならば、そういった問

題点は無視して、組織とともに運命を共にする覚悟で邁進するとう、一種の達観をともなった誠実さである。しかしこの「誠実さ」は「官僚的思考・行動」と危険な表裏一体をなす。

M・ヴェーバーは、「あたかも生ける機械のごとく、一点の狂いもなく迅速に、与えられた問題の合理的かつ能率的解決にあたる」(『権力と支配』)と、官僚タイプの人間の特徴を指摘した。梅原の場合も、戦時下の教団護持という「戦時下の与えられた問題」の解決に全力をあげて努力したということができよう。しかし梅原眞隆は、本書に描かれた通り、人間的魅力に溢れた人柄であり、「生ける機械」というものからは最も遠い存在であった。その決断と行動は「合理的かつ能率的」というよりも、やはり彼自身の「誠実さ」としか言いようのないものであった。そして、その力の源泉が、少なくとも梅原眞隆にあつては「念仏」であった。しかしその場合の「念仏」は、親鸞の説いた「念仏」と完全に重なるものなのか。難しい課題であり、むしろ、読者一人一人に、時代を真摯に生きた一人の念仏者の生涯を通して考えさせ

るのが本書の意義だろう。

このようなことを踏まえて、私の思いは以下のようなものになる。たしかに、梅原眞隆の、「国」あるいは「家」さらには「教団」という所与の課題を担おうとする誠実さと、そこから生まれる真摯でかつ効果的・現実的な対応には驚嘆すべきものがある。そのことを充分認めたいうえで、敢えて問わねばならない。問題は、「家」や「国」あるいは「教団」という、彼が所与のものとした、その枠組みそのものではなかったか、というところを。親鸞思想はその「国」や「家」や「教団」をも突き破る毒をもっていたからこそ、かの法難を経験せねばならなかったのではなかったか。

しかし、この課題は、むしろ現在の我々の課題である。この問いに対する著者の応答は、次の部分であろう。

今次の大戦を「聖戦」として宗門ぐるみで戦争に協力したことは、今にして見ると過ちだったと云わざるを得ないが、個人的にはともかく、当時の教団としては国策に反対することは、教団自体の存立

を危うくすることであった。

そのような国家的状況に於いて、梅原は「真俗二諦」や聖徳太子の十七条憲法の理念、伝教大師の護国仏教の精神にもとづいて、本願寺教団の存在価値を示すために奮励努力したのである。梅原の持論は、人はこの身体をもって国民として国家社会の中で生きる外ないということであった。(十八「戦後の復興をめざして」)

これは解答というよりも、むしろ著者からの問題提起であろう。我々は、この著作に安易な解答を期待してはならない。むしろ、この著作の意義は、問題の奥深さを示したことであり、また我々が、戦争協力の問題などに関して、梅原眞隆の言動や発言から安易に解答を引き出してはならないことを、明示したことにあるといえるだろう。

(『梅原眞隆の生涯』刊行会刊、法蔵館発売、二〇一三年七月、三〇〇〇円)

## 本の紹介

『差別とアイデンティティ』  
— 関係の大海をどう泳ぐか —

井岡康時

(奈良県立同和問題関係史料センター所長)

一、あのような者ではない……

還暦目前の評者が中学生のころ、つまり四十数年前のことである。級友と集まって話すうちに市内の別の中学校の話題となった。そこは暴力が横行し、金品がむしりとられる恐ろしいところであるという。負傷した者の体験談を聞いたという誰それの、さらにその友人から教えてもらったとかいう、幾人もの口と耳を介した話を中学生たちは興味津々で聞いた。その中学校は市内の東端にあつて生活圏が違つたため、実際にその学校を知っている者はいなかった。だが、想像をふくらませることは可能である。暴力が支配する無法の学校。その周辺地域の荒涼とした光景。

その時、評者もふくめた中学生たちは、自分が何者であるかを述べることはできなかった。しかし、その中学校に通う生徒や、その周

辺地域の住民とは違う自分、あのような者ではない自分を、そのように口に出したわけではないが、暗黙のうちに確かめあつていたように思う。同じ市内の中学生という全体集合のなかにあることは間違いないが、しかし、その全体のなかにあつてもあのような者とは違つたという、補集合のような自己認識。

差別や抑圧・排除といった行為とアイデンティティ形成などをめぐる論議は近年さかんになされているが、そうした話を聞き、論じられた書物を読むたびに、評者には、四十数年前の中学生たちの声や表情が思い出される。

私的な感慨はさておき、まず本書の概要を紹介しよう。『差別とアイデンティティ』は、畑中敏之・朝治武・内田龍史三氏の編著により、二〇一三年六月に阿吡社から刊行された。寺木伸明氏の「まえがき」と朝治氏の「あとがき」に

よると、本書は、二〇一〇年より部落解放・人権研究所の事業として取り組まれた「部落民アイデンティティの歴史的研究」と題した共同研究の成果をまとめたものである。研究会は朝治氏と中尾健次氏が共同代表となつて進められ、そのまま両氏が編集も担当して論文集をつくる予定であつたが、中尾氏の急逝により畑中・内田両氏が編集作業に加わつて刊行にいたつたという。

本書の構成は以下のようになつている。寺木氏の「まえがき」に続いて、「総論」として、畑中敏之「歴史における身分・アイデンティティ」、朝治武「部落差別と部落民アイデンティティ」、内田龍史「アイデンティティと表象の政治」の三論文が掲載されている。三論文は、それぞれに「差別とアイデンティティ」をめぐる総体的な考えを示すとともに、以下に紹介する一三本の論文の位置づけをおこなつていく。

次に、「I 身分とアイデンティティ」（以下、Iと略記）というテーマのもとに、中尾健次「撰河の在方非人番と在方小頭」、村上紀夫「一七世紀における悲田院長吏と由緒の成立」、藤井寿一「高野山「谷之者」の身分意識」、小笠原正仁「真宗信仰とアイデンティティ」、

高野豊「近世本願寺における身分呼称について—長御殿『撰津国諸記』の分析を通して—」の五論文が掲載されている。Iは表題からも明らかなように宗教に重点を置きつつ、前近代を扱う内容となつている。

次いで、「II 運動とアイデンティティ」（以下、IIと略記）というテーマのもとに、関口寛「部落改善運動と部落民アイデンティティ」、朝治武「全国水平社創立の地下水」、手島一雄「初期水平運動における「文章戦」と天皇主義—水国争闘事件、高崎区裁判所事件の反響」、駒井忠之「大正高等小学校差別糾弾闘争にみる木村京太郎のアイデンティティ」、前川修「朝田善之助の全国水平社解消論」の五論文が掲載されている。このうち前川論文は昭和戦前期を題材としつつ戦後を論じた内容となつているが、他の論文は時期的にはおおむね明治期から昭和戦前期を扱つており、IIは全体として近代を対象とした論文でまとめられている。内容は関口論文が部落改善運動、他の四論文が水平社運動を主題としており、社会運動にシフトが置かれている。

最後に、「III 政治とアイデンティティ」（以下、IIIと略記）というテーマのもとに、畑中敏之「爆弾三

勇士」をめぐる風評と部落問題」、内田龍史「部落差別への抵抗としての〈アイデンティティの政治〉」、廣岡浄進「被差別部落の地名を言明すること―『週刊朝日』連載「ハシシタ」打ち切りをめぐる政治―」の三論文が掲載されている。畑中論文は昭和戦前期から戦後期にかけての「爆弾三勇士」をめぐる風評」を追うことを通じてアイデンティティの変容をさぐるようとし、内田論文は社会学の手法によりつつアイデンティティ形成をめぐるさまざまな対抗関係を論じ、廣岡論文は二〇一二年から一三年にかけて大きな話題となった『週刊朝日』の連載記事をめぐる問題を扱い、Ⅲ全体では現代に目を向けた内容となっている。

二、このような者である……

冒頭にとりとめもない心象風景をつづつたが、「差別とアイデンティティ」について考えていくと、あのような者ではないとする補集合のような自己認識のことがどうしても気になる。そのころの中学生の幼い精神では、自分が何者であるかについて意識のぼらせることはできなかった。だが、あのような者ではないと意識する経験を繰り返して、これと応答しながら自分が何者かであるという確信を得ていくのではないか。そして、そうした心性の変容のなかで排除や忌避が生じる過程こそが問題ではないだろうか。

なお、本書の執筆者の多くは歴史学の研究者であり、書評する以上は各論文の実証の完成度についても検証しなければならぬが、本書のねらいから考えて、史料の取り扱いや評価の可否のことなどは当面留保しておいてもよいと思ふ。ここではそうしたことには言及せず、各論文に内在する論理の行き着く先に目を向けていきたい。「総論」の内田論文は、「差別によつて奪われてきた人間の尊厳を回復するために、自覚と誇りを内実とする一枚岩としての「部落民アイデンティティ」」が必要となり、これが、「自己を解放する〈アイデンティティの政治〉として機能してきた」と指摘する。

このような「一枚岩としての「部落民アイデンティティ」」はどのように形成されるのか。Ⅱの朝治論文は、大正期の新聞や雑誌から、被差別体験を述べたり自らの出自を明らかにする投稿を取りあげ、部落民衆は、「自らの被差別体験や部落問題に関する意見を表明すること」で、「部落民として主体形成をなしえる」と論じた。関口論文は、まず、明治・大正期を中心に社会事業家として活動した留岡幸助を取りあげ、留岡が依拠した社会有機体論が国が進める部落改善論の基調となっていたことを明らかにする。その上で、部落改善運動や水平社運動が、社会有機体論を「換骨奪胎し流用することにより（中略）主流社会の差別に抗議するに至った」と論じ、こうした「社会的実践を支える核」として「部落民アイデンティティ」があるとの考えを示した。

Ⅲの畑中論文は、いわゆる上海事変において「爆弾三勇士」とたたえられた三名の戦死者にかかわる風評に着目した。この三名は、当時の表現で「日本人の中の日本人」「大和民族の典型」としてたたえられるのだが、こうした「日本人―アイデンティティは、部落差別を正当化するアイデンティティとしても機能していた」と論じた上で、三名が部落出身であるという風評が事変当時から戦後にかけても流れていたことを指摘した。その上で、この風評が部落から発せられたとする説があることに触れ、そうであるなら、そのような風評を生み出した行為は、「被差別の根拠ともなっていた（『日本人の中の日本人』『大和民族の典型』）の意味を転換させて、非差別・反差別のアイデンティティとして獲得しようとするもの」であつたらうと述べた。

以上の朝治・関口・畑中三論文は、差別に抗して「部落民アイデ

ンテイテイ」なるものが形成されるようすを描いた。しかし、マジョリテイである外部との対抗にもとづくアイデンテイテイは必然的に緊張や軋轢を生むことになる。対峙して貫く道をいくのか、折り合の論理を生み出すのか、運動の実践家たちは選択をせまられることになる。

手島論文は、水平社運動のなかの「天皇主義的平等」の主張に着目し、こうした考え方が生まれてくる背景には、「糾弾闘争が引き起こした地域社会での混乱(中略)があり、その解決方向を模索するという共通した経緯があった」のではないかと指摘した。つまり、糾弾にともなう暴力性に対する社会的な嫌悪や反発に直面したことが、「融和運動との協同」や「天皇主義的平等」の発露へとつながるのではないかとみるのである。

駒井論文は、「全国水平社創立後のはじめの本格的な糾弾闘争」として知られる、奈良県でおこった大正高等小学校差別糾弾闘争を取りあげた。この糾弾では、暴行があったとして水平社の七名が検挙されるのだが、駒井論文は、「結果として偶発的に傷害事件となってしまった」ものの、その指導者であった木村京太郎には、「暴力に訴える気は毛頭」なく、

「冷静な判断力」にもとづき「慎重」に糾弾を進めようとしていたと論じる。そして、その背景には、「軽率な行動で水平社に対する世間の誤解をさらに招いたり、悪評に拍車をかけたり、社会の差別心を増幅させたりすること」「不本意」であり、「失態」であるととらえる木村の考えがあるとの見解を示した。

手島・駒井両論文は、水平社運動のなかに、「地域社会」や「世間」という名のマジョリテイへの調和志向が存在していたことを示すものといえるだろう。「階級」という名のマジョリテイに結びつこうとした人びともいた。

前川論文は朝田善之助の運動論を取りあげた。朝田は、「部落大衆を水平社という一つの身分組織に包含」することに反対し、労働階級の一翼に位置づけようとした全国水平社解消論に与したが、戦後においても解消論の主張を変えず、これが部落解放全国委員会の結成につながったという。論文中には、「水平社というものは、まったくくだらん存在であったわけです。今頃『水平社に帰れ』というている連中がいるが、はっきり言って、解消意見書を知っている連中ならこんなこといえません」という一九七七年の朝田の発言が引用

されており、朝田の運動論が戦前・戦後を通じて一貫していたことが示されている。

三、どのような者であったとしても……

差別に抗して「一枚岩としての「部落民アイデンテイテイ」」を形成するのか、それでは多くの人に支持されないと考えてマジョリテイとの協調や結合をめざすのか。II・IIIの各論文に描かれた人や組織は、この二つの戦略の間で呻吟しているように思われる。

IIIの内田論文は、一九九〇年代後半からアイデンテイテイをめぐる議論が活発になり、その方向は、「部落民」を「部落民」として差異を認め、部落外マジョリテイとの〈共生〉を推進することで「部落民としての解放」をめざす道と、系譜的なつながりを絶つて「部落民」を存在しないものとする「部落民からの解放」をめざす二つの道」に分かれたと整理しているが、内田論文がいうよりもはるかに早い時期から原初的な「二つの道」が存在していたのではないだろうか。

では、この古くて新しい「二つの道」をどのように止揚するのか。IIIの内田・廣岡両論文は、この難

問に応答しようとしている。内田論文は、「部落民としての解放」をめざすことによって形成されるアイデンテイテイが、場合によっては「抑圧として働くこと」の危険性を認めつつ、そうしたアイデンテイテイが、「差別と戦うために構築されてきたという歴史を常に参照することによって、さらにはその内実(個々人)は多様であることを示すことをもって、その危険性のある程度は回避できる」との判断を示している。内田論文は「部落民としての解放」に展望をみいだそうとしているようである。

廣岡論文は、「部落差別においては、アイデンテイテイを持つことを阻まれることが差別」であるとして、部落住民のみならず、「部落を離れた部落出身者」の「ディアスポラの名乗り」を重視し、「隠蔽」を拒否する。廣岡論文もまた「部落民としての解放」に未来を託しているように思われる。

しかし、こうしたことで「二つの道」の相克を止揚できるだろうか。IIIの内田論文もいうように、近年では、アイデンテイテイを「不変で本質主義的にとらえる「連続性」や「同一性」の概念については疑念が呈されて」おり、



「多元的であり、また、相互作用において構築され続けるもの」での認識が広まっている」のではないのか。同じことを、「総論」の朝治論文は、「全国水平社当時のような部落民意識や部落民アイデンティティは継承すべき思想的・理念的内容があるとして、そのままたま今日に適応させるには無理がある」と述べている。おそらく「二つの道」のどちらかではなく、新たな発想でブレイクスルーを果たす方法をみいださなければならぬのだろう。むろん容易ではない。朝治論文は、先の言葉に続けて次のように吐露している―「部落民アイデンティティは今日的な段階と状況にふさわしい内容に変容させて新たな構築を図っていくべきであるが、いまだ具体像を描くことができていない」

ならば、「具体像を描く」ためにはどうすればよいか。ただちに可能な方法は知らないが、さしあたるの準備作業として次のように考えている。先に引用したⅢの内田論文は、「部落民アイデンティティ」を「差別と戦うために構築されてきた」という視点に限定して性格づけているように感じられるが、もう少し広い世界のなかに位置づけて比較検討してはどうだろうか。そうした相対化の視点を

二つ提起しておきたい。

一つは本書の藤井論文によって示唆されている。藤井論文は、「高野山の三昧聖である谷之者」を扱っているが、そのアイデンティティ形成の契機について、向けられた賤視とともに、「行基の遺戒を守る弟子筋」という觀念や、「専門職能集団としての自負」があつたことを指摘している。つまり、アイデンティティの形成過程に差別以外の因子を想定しているのである。

こうしたことは部落にもあつた。関口論文は、大和同志会の機関誌『明治之光』が「部落に伝わる由緒や伝承などを紹介し続けた」ことを指摘している。論文中に詳細は述べられていないが、実際に『明治之光』にあたってみると、河原巻物や貴種流離譚など多様な世界が描かれている。こうした「由緒や伝承など」がなぜⅡ・Ⅲで取りあげられなかったのか。これらとして「差別と戦うために構築されてきた」觀念の一つであり、あえて論じる必要もないということになるのだろうか。しかし、差別に直接的に対抗するのではなく、「由緒や伝承など」に依拠した新たな物語を生成することによってアイデンティティ形成に影響を与えるという複雑な回路が準備され

てきたことを軽視してはならないと考える。むろん、河原巻物や貴種流離譚のことなどを今日信じる人はいない。だから現代的な意味はないということになるのだろうか。しかし、日々の暮らしのなかで今もアイデンティティにかかわる物語が生まれてはいまいか。つい最近まで多くの部落で担われていた皮革・食肉・履物などの仕事にかかわる物語は「由緒や伝承など」と無縁であつたらうか。こうした問題にいささかなりとも考慮がはらわれておれば、Ⅱ・Ⅲで描かれた「部落民アイデンティティ」は、さらに豊かで立体感あるものになったと思われる。

もう一つは、個人的な関心に拘泥して申し訳ないが、あのような者ではないとする補集合のような自己認識を視野に入れることではないかと思う。あのような者ではないと、このような者ではないと、二つの認識は、メダルの表裏のように不可分で相補う性質をもっていると考えられる。したがって、部落民のなかにも、あのような者ではないという排除や忌避を含む認識が生まれているはずであり、そのうちからこそ、このような者であるというアイデンティティが成立するのではないか。

そのアイデンティティは右のように「相互作用において構築され続ける」のであり、例外であることではない。相対化を提起することと、部落差別はなくなっているとか、大した問題ではないなどといったいわけではない。現代においては、人びとが依拠していた自明性が相対化され、不安定性や不確実性が増大しており、こうしたリスキーな状況のなかで、帰属しうる準拠集団を求め、自己防衛を強めようとする感情が高まっているように思われる。危険な緊張を緩和するためにも、部落差別をどのように解明するか、研究者の覚悟が問われている。だからこそ、どのような者であつたとしても、と鳥瞰した上で、改めて「部落民アイデンティティ」を位置づけ、差別との関係を考えてみる必要があると思う。

孤立化が進んでいるかみえて、一方で息苦しいほどの密なかわりが生まれている。多様化と複雑化が進行する関係の大海のなかでアイデンティティは日々更新・生成される。この海洋をどのように泳ぎ切るか。編者・執筆者にはぜひ続編をお願いしたい。

(阿吽社刊、二〇一三年六月、二五〇〇円)

生 第三章 農村とキヨメー関係性と分断と未来 川元祥一

『地の群れ』が描く差別と差別の衝突と交わり 部落問題に迫る遠近法としての映画 3 山本崇記  
水平社論争の群像 12 日本水平社 朝治武

**部落解放 685号** (解放出版社刊, 2013. 11) : 1,050円  
特集 解放教育 学校を変える被差別マイノリティの子どもたち

**部落解放 686号** (解放出版社刊, 2013. 12) : 630円  
特集 識字・日本語学習運動をめぐるこれから  
だれでも、どこでも、何歳でも義務教育が受けられるように 夜間中学の歴史と法整備の課題 草京子／おおさか  
識字・日本語センターの挑戦 田村幸子／大阪市における部落の識字活動の未来を求めて 巡回写真展『識字のこれまで、いま、そしてこれから』にかけた願い 菅原智恵美／PIAAC (OECD国際成人力調査) の概要と期待 立田慶裕

本の紹介 村上紀夫著『まちかどの芸能史』 水本正人  
大阪とハンセン病ゆかりの地 4 三宅美千子  
部落文化・再生文化 循環型社会の基軸／地域社会の再生 4 部落の伝統芸能一門付芸の主体と論理 川元祥一  
水平社論争の群像 13 全国水平社解消論 朝治武

**部落解放 687号** (解放出版社刊, 2014. 1) : 630円  
特集 ウリハッキョ 民族の誇りと共生を求める朝鮮学校  
本の紹介 『うちは精肉店』 (本橋成一写真と文) 足立須香

「生」の本質を見続けてきた家族の記録 額綱あや監督のドキュメンタリー映画「ある精肉店のはなし」が完成 太田恭治

被差別部落の文化遺産を保存・活用しよう 大阪・住吉地区のとりくみの紹介 友永雄吾

婚外子相続分差別違憲決定が問いかけたものは何か 二宮周平

障害者虐待防止法施行から1年 その成果と課題 竹端寛

**部落解放研究 199** (部落解放・人権研究所刊, 2013. 11) : 1,400円

特集 困難を抱える若年者のリテラシーとその支援  
特集にあたって なぜ、いま「若年者のリテラシー」なのか? 岩槻知也／欧米の成人基礎教育と日本の社会教育 批判的リテラシーとの関連において 上杉孝實／学校を離脱した子どもへの支援 「田川ふれ愛義塾」におけるエンパワメントアプローチの試み 松下一世／非行系青少年支援における「男性性」の活用 文化実践に埋め込まれたリテラシーに着目して 知念渉／若者への学び直し支援の実際 釧路自主夜間中学「くるかい」の現場

から 添田祥史／地域におけるリテラシー支援の場としての識字学校 困難を抱える若年者にとっての識字 棚田洋平

2007年改正戸籍法の検討課題と本人通知制度の展望 二宮周平

中村拓三の「解放の学力」論成立に関する一考察 板山勝樹

資料 部落解放・人権啓発基本方針 (第3次) 部落解放・人権研究所啓発部会

マイノリティと教育権 第22会期人権理事会に参加して 阿部千里

書評 大森直樹・渡辺雅之・荒井正剛・倉持伸江・河合正雄編『資料集 東日本大震災と教育界 法規・提言・記録・声』 佐々木賢／大本敬久『触穢の成立 日本古代における「穢」概念の変遷』 水本正人

**部落解放研究くまもと 66** (熊本県部落解放研究会刊, 2013. 10)

マスコミと差別表現を考える—『週刊朝日』問題を契機に— 小林健治

九州地方近世皮草史の特質—研究史の整理と課題 のびしょうじ

熊本の被差別部落史編さん通信 山本尚友

**リベラシオン 152** (福岡県人権研究所刊, 2013. 12) : 1,000円

特集 全九州水平社創立90周年に学ぶ

全九州水平社創立90周年に学ぶ～松本治一郎・井元麟之資料を中心とした高松結婚差別糾弾闘争について～ 竹永茂美／熊本県水平社創立期群像 花田昌宣／どうする? 「全国水平社」の授業 長岡俊光

史料紹介 新聞に見る部落問題関係史料 13—『全九州水平社史料集 (仮)』草稿より— 旧『全九州水平社史料集』プロジェクト

小特集 伊豆丸鼎先生を偲ぶ 西尾紀臣, 野上早苗, 林力, 川向秀武

民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 17 福沢諭吉『福翁自伝』を読む—福岡藩の蘭学と解剖 10— 石瀧豊美  
中世河原者の庭づくりについて—銀閣寺 (慈照寺) 庭園を中心に— (下) 上杉聰

資料紹介 生活の柄 70—「近世民衆史の泉」改め— 「友枝手永大庄屋日記」から慶応4 (1868) 年・明治4 (1871年) 竹森健二郎

**和歌山研究所通信 46** (和歌山人権研究所刊, 2013. 11)

高野山と被差別民—「金剛峯寺日並記」から見えてきたこと— 矢野治世美

13. 11) : 350円  
 特集 「組織活動の前進と要求の事業化」交流会  
**月刊地域と人権 356** (全国地域人権運動総連合刊, 2013. 12) : 350円  
 特集 第9回地域人権問題全国研究集会  
**地域と人権京都 655号** (京都地域人権運動連合会刊, 2013. 10. 15) : 150円  
 同和奨学金返還問題の検討 20 川部昇  
**地域と人権京都 656号** (京都地域人権運動連合会刊, 2013. 11. 1) : 150円  
 同和奨学金返還問題の検討 21 川部昇  
**地域と人権京都 657号** (京都地域人権運動連合会刊, 2013. 11. 15) : 150円  
 同和奨学金返還問題の検討 22 川部昇  
**地域と人権京都 659号** (京都地域人権運動連合会刊, 2013. 12. 15) : 150円  
 同和奨学金返還問題の検討 23 川部昇  
**創 479号** (創出版刊, 2013. 10) : 680円  
 ネット時代の新たな差別問題 江戸古地図ブームで浮上した差別問題の深刻 編集部  
**であい 619** (全国人権教育研究協議会刊, 2013. 10) : 150円  
 人権文化を拓く 192 自分の殻を越え出る 湯浅誠  
**であい 620** (全国人権教育研究協議会刊, 2013. 11) : 150円  
 「統一応募用紙」40周年と同和教育 桐畑善次  
**であい 621** (全国人権教育研究協議会刊, 2013. 12) : 150円  
 人権文化を拓く 193 大学でなにができるかを考え続けて 池田賢市  
**鳥取県部落史研究会のあゆみ 10** (鳥取県部落史研究会刊, 2013. 5)  
 戦後同和教育史余話 山本寛  
 舞鶴「新部落」の形成と解放への主体形成 國歳眞臣  
 江戸時代の水運と穢多村—千代川・八東川を中心に— 徳永耕一  
 「宣言」を読む 朝治武  
 鳥取県内の差別戒名について 西村芳将  
 鳥取藩における差別の具体像 坂本敬司  
 新聞記事にみる大正期の部落改善政策 西村芳将  
**奈良人権・部落解放研究所紀要 31号** (奈良人権・部落解放研究所刊, 2013. 3) : 1,500円
- 鴨神に関する一考察＝鴨以外のカモ神について 辻本正教  
 第二次大戦後初期の奈良県における部落問題関係新聞記事リストと解説 井岡康時  
 服部英雄氏の近著『河原ノ者・非人・秀吉』をめぐって 奥本武裕  
 第39回奈良県・人権部落解放研究集会全体会記念講演録 人が生きるために必要なもの 田口ランディ  
 奈良人権・部落解放研究所研究紀要総目次  
**年報近現代史研究 4** (近現代史研究会刊, 2012. 3)  
 1920-30年代の失業救済事業の地域的展開と「登録労働者」—京都市失業救済事業を事例に— 杉本弘幸  
**はらっぱ 346** (子ども情報研究センター刊, 2013. 12)  
 特集 「改憲論」について考える  
 婚外子差別と寡婦控除問題 秋吉晴子  
**ヒューマンライツ 307** (部落解放・人権研究所刊, 2013. 10) : 525円  
 特集 繰り返される冤罪を考える  
 書評 畑中敏之・朝治武・内田龍史編著『差別とアイデンティティ』 「アイデンティティ」論の盛行と今後 黒川みどり  
**ヒューマンライツ 308** (部落解放・人権研究所刊, 2013. 11) : 525円  
 特集 高齢者の人権  
**ヒューマンライツ 309** (部落解放・人権研究所刊, 2013. 12) : 525円  
 特集 雇用をつくる  
**ひょうご部落解放 150** (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2013. 9) : 700円  
 特集 日本国憲法を守る  
 差別報道と貧困拡大社会—部落問題に学ぶ視点— 平野次郎  
 日・印・英比較の視点からみる社会史としての皮なめし業 西村祐子  
 イギリス・ノーザンプトン見聞記 柏葉嘉徳  
 海文堂書店閉店に思うこと 山田利行  
**部落解放 684号** (解放出版社刊, 2013. 11) : 630円  
 特集 「在特会」とヘイトスピーチ  
 本の紹介 『差別とアイデンティティ』 (畑中敏之・朝治武・内田龍史編著) 野口道彦  
 大阪とハンセン病ゆかりの地 3 三宅美千子  
 部落文化・再生文化 循環型社会の基軸/地域社会の再

創立五十周年記念号

大坂千日前「竹林寺」の創建について 村上紀夫

**高知市立自由民権記念館紀要 21号** (高知市立自由民権記念館刊, 2013. 9)

西本利喜と高知の部落解放運動 吉田文茂

**在日朝鮮人史研究 43** (在日朝鮮人運動史研究会編, 2013. 10) : 2,400円

戦前期の大阪の朝鮮人と選挙一四回の総選挙に立候補した李善洪を中心に 塚崎昌之

民戦から朝鮮総連へ—路線転換の歩み 尹健次

戦後日本社会における朝鮮人生活保護受給「問題」の形成に関する一考察—朝連強制解散～朝鮮戦争下における朝鮮人生活保護受給者の動向から 金耿昊

在日コリアン高齢者一世と介護—特別養護老人ホーム「故郷の家・京都」における介護サービスの現状 西田知未

共に生きるコリアンな街づくり—川崎「おおひん地区」の地域的文脈 橋本みゆき

二〇一三年八月の東京踏査紀行文 鄭喜允

<資料紹介>金天海 自伝的記録(草稿) 樋口雄一

**狭山差別裁判 443号** (部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2013. 2) : 300円

野間宏と寺尾判決 20 庭山英雄

**ジェンダー研究 15** (東海ジェンダー研究所刊, 2013. 2)

史料紹介 1950年代における全日本自由労働者組合婦人部関係史料について—史料紹介 『婦人部ニュース』・『全国婦人代表者会議議事録』・『全国婦人部長会議会議録』— 杉本弘幸

**社会科学 100** (同志社大学人文科学研究所刊, 2013. 11) : 1,000円

都市社会政策の再編成と市政・地域社会—1920—1930年代の京都市崇仁学区における社会事業運営を中心に— 杉本弘幸

総目録 第1号～第100号 (1965年～2013年)

**人権21 調査と研究 227** (おかやま人権研究センター刊, 2013. 12) : 650円

特集 教科書問題

**人権と部落問題 850** (部落問題研究所刊, 2013. 11) : 630円

特集 高校生の自主活動

文芸の散歩道 多喜二の習作期にみる改作過程について

3 川端俊英

**人権と部落問題 851** (部落問題研究所刊, 2013. 12) : 630円

特集 加速する改憲策動

文芸の散歩道 絶望の台湾山岳戦線 安藤盛著『或る討伐隊員の手記』(発禁本) 秦重雄

**人権と部落問題 852** (部落問題研究所刊, 2014. 1) : 630円

特集 広がる貧困と生活保護

文芸の散歩道 谷口善太郎原作の映画「狐の呉れた赤ん坊」について 水川隆夫

追悼 畦地享平先生 中野功

**振興会通信 112** (同和教育振興会刊, 2013. 9)

同和地区における真宗事情調査 北陸地方 中間報告 「同和地区における真宗事情調査」委員会

シリーズ『私と同朋運動』7 運動と共に 太田心海

同朋運動史の窓 19 左右田昌幸

**真宗 1316号** (真宗大谷派宗務所刊, 2013. 11) : 250円  
人の世に熱あれ人間に光あれ 14 真宗大谷派同和関係寺院協議会

**真宗 1317号** (真宗大谷派宗務所刊, 2013. 12) : 250円  
人の世に熱あれ人間に光あれ 15 真宗大谷派関係寺院協議会

**季刊人権問題 373** (兵庫人権問題研究所刊, 2013. 10) : 735円

八鹿高校事件の真実を改めて世に問う 11 生徒達が見た“八鹿高校事件”(下)

**スティグマ 207** (千葉県人権センター刊, 2013. 10) : 500円

連載 講演「温故知新一千葉県同和教育のこれから」 鎌田行平

**地域と人権 1129号** (全国地域人権運動総連合刊, 2013. 10. 15) : 150円

国民的融合論との対話—部落問題解決への理論的軌跡と展開— 31 学者の貢献 8 丹波正史

**地域と人権 1131号** (全国地域人権運動総連合刊, 2013. 12. 15) : 150円

大分県の教育現場の状況 学校で、ことさら強調する「ケガレ」と「差別」

国民的融合論との対話—部落問題解決への理論的軌跡と展開— 32 学者の貢献 9 丹波正史

**月刊地域と人権 355** (全国地域人権運動総連合刊, 20

央本部

解放の文学 92 マアウン・マアウン・ピュー『初夏 霞立つ頃』 音谷健郎

ぶらくを読む 84 日本中世社会と被差別民 湧水野亮輔

解放新聞 2648号 (解放新聞社刊, 2013.12.23) : 90円  
本の紹介

『「助けて」と言える国へ一人と社会をつなぐ』 (奥田知志, 茂木健一郎著) / 『パンとペン 堺利彦と「売文社」の闘い』 (黒岩比佐子著) / 『血盟団事件』 (中島岳志著)

解放新聞大阪版 1970号 (解放新聞社大阪支局刊, 2013.11.5) : 70円

『週刊朝日』が安中で謝罪

解放新聞改進黨 444号 (部落解放同盟改進黨支部刊, 2013.11)

ルポ 改進黨地区の今

解放新聞東京版 822号 (解放新聞社東京支局刊, 2013.10.15) : 90円

良質な革の生産に生きる 2 業界保護や皮革文化の振興にとりくむ 齊京昭

解放新聞東京版 823号 (解放新聞社東京支局刊, 2013.11.1) : 90円

良質な革の生産に生きる 3 業界保護や皮革文化の振興にとりくむ 齊京昭

解放新聞奈良県版 988号 (解放新聞社奈良支局刊, 2013.10.25) : 50円

まちづくり運動のための史料紹介 7 大和国葛下郡東山村関係史料 辻本正教

解放新聞奈良県版 989号 (解放新聞社奈良支局刊, 2013.11.10) : 50円

まちづくり運動のための史料紹介 8 大和国葛下郡東山村関係史料 辻本正教

解放新聞奈良県版 990号 (解放新聞社奈良支局刊, 2013.11.25) : 50円

主張 部落民は恐れられているのが実情。いったい何故。理論編の序 2

解放新聞福岡県版 485号 (解放新聞社福岡支局刊, 2013.9.15) : 50円

西日本新聞の「過去帳」記事に申入れ

語る・かたる・トーク 224 (横浜国際人権センター刊, 2013.10) : 500円

「解放教育」継承への扉 21 「竹田の子守唄」に教えら

れたこと 1 外川正明

語る・かたる・トーク 225 (横浜国際人権センター刊, 2013.11) : 500円

「解放教育」継承への扉 22 「竹田の子守唄」に教えられたこと 2 外川正明

語る・かたる・トーク 226 (横浜国際人権センター刊, 2013.12) : 500円

「解放教育」継承への扉 23 「竹田の子守唄」に教えられたこと 3 外川正明

かわとはきもの 165 (東京都立皮革技術センター台東支所刊, 2013.9)

靴の歴史散歩 110 稲川實

皮革関連統計資料

関西大学人権問題研究室紀要 66号 (関西大学人権問題研究室刊, 2013.9)

大坂町奉行吟味伺書の考察 4 藤原有和

ハンス・アスペルガーの1938年講演論文とウィーン大学の治療教育 加戸陽子, 眞田敏, 齋藤公輔, Johannes Pl an

「水平社創立宣言」添削説の考察—「添削説」は牽強附会の謬説である— 宮橋國臣

ラサ市域関区市民への公開書簡—ラサ3.14後のチベット政策の一端 山田勅之

京都部落問題研究資料センター通信 33号 (京都部落問題研究資料センター刊, 2013.10)

戦後マイノリティ研究と西成情報アーカイブ 吉村智博

清水坂の「坂の者」と葬送・寺社 村上紀夫

収集逐次刊行物目次 (2013年7月~9月)

グローブ 75 (世界人権問題研究センター刊, 2013.10)

「旧同和地区」という表現から考えるまちづくりのいま 山本崇記

困難を抱える若者のリテラシーとその支援 岩槻知也

クロノス 35 (京都橘大学女性歴史文化研究所刊, 2013.11)

特集 妹の力—奇跡をもたらす女たち

シリーズ 衛生と衛生観念の歴史的研究

1 「文明国標準」と人種 酒井一臣/2 大正期の地域の衛生状況—京都府紀伊郡上鳥羽村塔ノ森— 高久嶺之介

藝能史研究 202 (藝能史研究会刊, 2013.7) : 1,800円

特集 近世日本・琉球・中国の芸能交流

藝能史研究 203 (藝能史研究会刊, 2013.10) : 1,800円

# 収集逐次刊行物目次 (2013年10月～12月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

明日を拓く 100 (東日本部落解放研究所刊, 2013. 3) :

1,050円

100号記念フォーラム これからの部落解放運動を拓くために

フォーラム 1 部落解放運動の現在を考える

東日本の部落解放運動の歴史と課題 藤沢靖介／部落解放運動との出会いと歩み 古河誠／同和教育・解放教育の今後 鎌田行平／互いにかげがえのない者どうしとして—東京都部落研・外文研連絡会議がめざしてきたこと、大切にしてきたこと—申谷雄二／ダリト解放運動と部落解放運動の対話のために 友常勉

フォーラム 2 社会運動のこれからを探る

生活困窮者支援の現場から 稲葉剛／セクシャルマイノリティの社会運動—連帯の困難さをめぐって— 森山至貴／自分の選んだ地域で、選択した暮らし方を実現するために—障害は社会にある— 増田一世／沖縄の反基地・反沖縄差別運動の現状と展望 安次富浩／差別のジェンダー・ポリティクス 井桁碧

座談会・二つのフォーラムを終えて 部落解放運動の原点と反差別社会運動との連携の可能性 友常勉・井桁碧・鐘ヶ江晴彦・松浦利貞・藤沢靖介・吉田勉

IMADR-JC通信 175 (反差別国際運動日本委員会刊, 2013. 10) : 750円

特集 先住民族の権利実現 世界・日本から見る

ウイングスきょうと 119 (京都市男女共同参画推進協会刊, 2013. 12)

図書情報室新刊案内

『ミシンと日本の近代 消費者の創出』 (アンドルー・ゴードン著) / 『翻訳がつくる日本語 ヒロインは「女ことば」を話し続ける』 (中村桃子著)

解放新聞 2638号 (解放新聞社刊, 2013. 10. 14) : 90円  
『週刊朝日』差別記事事件糾弾要綱

解放新聞 2639号 (解放新聞社刊, 2013. 10. 21) : 90円  
解放の文学 90 『山の麓の老人』 (アジジ・ハジ・アブドゥラー著) 音谷健郎

今週の1冊 『憲法が変わっても戦争にならない?』 (高橋哲哉・斎藤貴男編著)

解放新聞 2640号 (解放新聞社刊, 2013. 10. 28) : 90円  
今月の本@ランダム

『部落・差別の歴史』 (藤沢靖介著) / 『遺伝子組み換え食品入門』 (雨笠啓祐著) / 『動物農場』 (ジョージ・オーウェル著・開高健訳)

ぶらくを読む 83 中世社会論の新しい動向と被差別民 湧水野亮輔

解放新聞 2641号 (解放新聞社刊, 2013. 11. 4) : 90円  
今週の1冊 『原典でよむ日本デモクラシー論集』 (堀真清著)

解放新聞 2642号 (解放新聞社刊, 2013. 11. 11) : 90円  
解放の文学 91 土方鑑『地下茎』 音谷健郎

解放新聞 2643号 (解放新聞社刊, 2013. 11. 18) : 80円  
映画 「ある精肉店のはなし」 監督瀬瀬あやさんにインタビュー 中村一成

解放新聞 2647号 (解放新聞社刊, 2013. 12. 16) : 90円  
「秘密保護法」成立に対する抗議声明 部落解放同盟中

## 事務局よりお知らせ

◇2013年度部落史連続講座は無事終了しました。ただいま講演録の作成中です。3月末には発行の予定です。ご希望の方はメールまたはFAXでご連絡ください。

◇2014年度も6回の予定で連続講座を開催します。詳しくは次号でお知らせいたします。ぜひご参加ください。

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階

□TEL/FAX 075-415-1032

□URL <http://suishinkyokai.jp/shiryo/index.html>

□開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 11時～17時 (祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分